

〈史料紹介〉

東京府文書「府治類纂 地輿」(その四)

横山 百合子

史料紹介「東京府文書「府治類纂 地輿」(その三)〔千葉経済大学論叢〕四一号所収)に続き、東京府文書「府治類纂 地輿 第十七冊」(東京都公文書館所蔵 東京府文書、請求番号634.44.17)のうち、目次番号三十八〜六十のの記事を紹介する。凡例は、(その一)を参照されたい。

『三十八』

『己巳七月五日小印』

- 是迄武家地え住居致し居候町方人別之者、又町医師・御用達町人・相撲・検校・勾当等は、総而來住町人別之部
二入、其所年寄共右地所拝借証文え加印致差出候ハ、当分差置、地稅為差出可申旨御布告二付、左之通奉伺候
一、右御布告武家地之義は、埒田又は駿府移住ニ而土地相成候地処ニ御座候哉
一、右調方は地稅御取立之義ニ付候得は、上地之分計ニ而可宜哉
一、同断住居之もの人別取調候義ニ候得は、屋敷主有之候地所ニ而も取調可申哉
一、町中に交り候百姓地抱屋敷ニ致、武家構相成り居、此場所え町人其外住居之者、同様取調可申哉
一、地稅之義は壹ヶ年何程宛為差出可申哉、且場所柄ニ寄從來差出候儘為差出候義ニ候哉

一、地所拝借願之者、是迄居付候者并新夕ニ拝借住居望人有之節、其者入用丈ケ之坪数取調絵図面ヲ以為相願可申哉

一、拝借人ニ而も、朝臣又は諸家ニ来之分都而町方人別ノ入相成間敷、御支配違之者は取調不仕候積

一、儒者・出家等之内、浪人名目之分等、如何相心得可申哉

一、地所拝借人之義、請人為相立、諸事最寄町方支配請、地稅等滞候節、請人より為相納候様仕度

一、是迄住居人之内、家作致し町人等え又貸致し有之候分は、家作主より一手ニ地稅為差出様可仕哉

一、住居人共為組合、御布告其外最寄年寄より通達為致候様可仕哉、且場広之分は住居人之内入札人撰之上取極候敷、又は順番ニ而も相立、其組合丈通達為致候様可仕哉

一、地稅取立方之義は、住居人之内右人撰敷、又は順番之者ニ組合限為取立、最寄町年寄え為差出候而、町年寄より出納方え為相納可申哉

但、取立方は、四季敷ニ季位ニも前納可致哉

一、右住居人共最寄町方之来住人別ニ加り候上ハ、家前往還行倒其外臨時入用筋等可相掛候得とも、住居人家並ニ無之候間、小間割等ニも相成兼、殊ニ拝借人より町入用為差出候も不都合ニ付、地稅之内え籠為相納、右入用は御下渡可相成哉

一、地所拝借願之義、前書地受人加印ニ而、最寄中年寄添翰ヲ以願書差上候様可仕候

一、武家地住居之町人其外、最寄町方来住人別ニ加り進退可受旨、其御筋より住居人一統え御布告御座候様仕度
右之廉々奉伺候、以上

巳六月

世話掛 年 寄 共

附札

一、壹・貳・三・四ヶ条とも書面之通

一、五ヶ条、地主え差出候地代之高爲書出、并新規拜借之分は、最寄地代見競、願書ニ添可差出、夫々調之上可及沙汰

一、六・七ヶ条、書面之通

一、八ヶ条、浪人は無之筈ニ候得共、万一右様之もの有之候ハ、申立、町人別ニ組入候義と可心得

一、九・十ヶ条、書面之通

一、十一ヶ条、組合相立順番ニ通達可致

一、十二ヶ条、順番相立、右之もの地代月々取集、町年寄せ相渡、出納方えは四季ニ先納可致、地代上納高外ト壹

割五分は、元人別町之余荷ニ相成候廉え遣払可申

一、十三ヶ条、元人別町入用筋之義は、前書ノ余荷金之内ヲ以遣払、尤地代之義は相当ニ引下可遣候間、拜借地最

寄掛り合之場所ニ異変等有之候節は、組合之拜借人共一同出金取始末いたし、元人別町え失費不相掛様取計可申

一、十四ヶ条、武家上地ニ住居候町人は、改而拜借願濟相成候ものニ而も、看板・暖簾等差出商完致し候義不相成、

且、檢校・角力等之外商人共は、今後拜借難相成候

一、十五ヶ条、追而御布令可有之候得共、引受之町年寄共、軒別ニ申聞候様可致

以上

諸官勤仕之者家来、又は諸藩家来倍従等、其主人より添書持参ニ而拜借地願出候分

宮方家来ニ而、同役等より前同様武士地拜借願出候分

右之類、事実無余義筋ニ而、戸籍明亮ニ御座候ハ、最寄並合之地代爲差出、拜借地願濟相成候而可然哉、此段相

伺申候

七月

伺

常務局
屋鋪改

一、土地相成候町屋敷之儀、町人共より買下ケ又は受負地等ニいたし度旨、追々願出有之候得共、右一切買下ケ受負地ニ不申付、總而東京府附ニいたし、何れも是迄地借共より從來地主え差出来候地代・町入用差引、月々当府え取立可申哉之事

伺之通ニ而可然

一、同断之地所ニ而、当今皿地之場所え新規家作取建度旨願出候節は、拝借地ニ申付、地代は当府え取立可申哉之事

伺之通、併難致永続場所は、新規家作取建候義は不差免方可然哉

一、土地相成候町屋敷之内、当時住居人も僅ニ而町入用而已相嵩候場所は、建家有之候地所丈ケ沽券地ニ引直、其余ハ桑茶可為植哉之事

一、同断之地所ニ而住居人も無之皿地相成居、家作願人も無（²）も候得は、武家地ニ引直シ桑茶之兩種可為植哉之事
右兩条、場末ニ候得は伺之通、其余は追々換地之見込も有之故、其儘差置候方可然歟

一、川岸地・原地・野垂地・明地共、新開町屋又は物置納屋等取建度旨ニ而、買下ケ受負地等ニいたし度願出候節は、取調差支無之上は、拝借町地川岸地等ニいたし、最寄地位見競、地代は当府え取立、家作ハ願人え可申付哉之事

伺之通、尤本文之通ニ而不都合之場所は、其情実ニ依リ可取調事

右之通凡取極置度、尤場所ニ寄候而は夫々見込相附ケ可申上之事ニ候得共、先書面之振合ヲ以、今後取調可相伺哉之事

巳九月十二日

『三十九』

『巳巳十一月七日町触』

組々 中添年寄

旧幕府臣ヲ始、総テ町人ニ至ル迄、町地之内受領地或は借地・預り地等之分、土地ニ被仰出候間、去辰七月中申渡之趣も有之処、今以心得違之者も有之ニ付、猶又申達候間、委細最前申渡之通相心得可申事

十一月

右之通不洩様可触示もの也

『四十』

『巳巳十一月』

万石以上以下とも御規則之外屋敷拝借地代、左之通

内神田・浜町・木挽町辺 百坪ニ付

甲 壺ヶ年 永三貫文

郭内并築地辺 百坪ニ付

乙 同 永貳貫三百文

郭外 百坪ニ付

丙 同 永壹貫文

同場末横小路之分 百坪二付

丁 同 永五百文

但、番町辺は追而地代相定候積二付、当分之内無地代之事

極場末等二至候而は、永五百文より相減為積、尤其節評議之事

宮堂上方并諸藩家来、町絵師・用達町人・角力・檢校・勾当・米住町人別之者は、其最寄並之地代ヲ以取調可申事

巳十一月

『四十一』

『巳巳十一月十五日伺濟』

東京府下抱屋鋪之儀は、武家・社寺・百姓等之無差別、前々より所持いたし来勝手二付、讓渡之節其時々願出、差支無之分は申渡、屋鋪帳書改候処、右抱屋敷之内ニ役人足賃銀附之場所所有之、囲家作坪数ニ応し年々取立来申候、然ル処、抱屋鋪ヲ百姓地戻ニ相願候節ハ、吟味之上囲家作取払全田畑ニ致し、屋敷地之廉を除帳消いたし、其通申渡来候処、並之抱屋敷は右ニ而差支無之候得共、賃銀附抱屋敷之分は、百姓地戻聞添候ハ、次第ニ廉減相成、且又囲家作等自然取壊残等ニて其儘に成行候而は、却而取締ニも相拘り可申哉と存候間、以来ハ賃金附抱屋敷之分は、百姓え相讓候とも、全之百姓地戻いたし候義は難相成筋と奉存候間、此段相伺申候

但本文役人足賃銀、此節上納期月二付、出銀取集之義向々廻達差出可申候

巳十一月

『四十二』

今般、地方ニ關係致し候義は、御府より直ニ処置可相成旨御布告相成、就而は東京道路復繕之義、当司取扱候処、

右は総而於御府御取扱之御見込ニ有之候哉、及御問合候也

十一月廿日

民部省

土木司

東京府御中

御書面之趣承知致し候、地方関係之義は、当府ニ而一般処置可致義ニ有之候、尤官普請之箇所は御司ニ而御取計可有之義と存候、其余橋・路・下水之義も、無余義官普請取調候節は、其時々御掛合之上、仕立方等之儀は御司ニ而御取扱有之候様致し度、此段御答および候也

東京府

『四十二』

『己巳十一月五日』

昨年来諸屋鋪取扱之儀ハ、万石以上以下之差別ヲ以取調致し来候処、今般武家地之分共一切管轄ニ被仰出候上ハ、以来華族・士族共、屋敷地は勿論地方取締向等之儀ハ、府より直達ニ致シ候間、願立之儀も当府え差出しに相成候様いたし度、且公事合・出入引合等ニ付呼出し候而之儀も、是迄は弁官え相達し、同官々御達ニ相成来候得共、以来は前同様府より直達にいたし候間、此旨華族士族ニ到迄、早々御達ニ相成候様いたし度奉存候、以上

東京府

御附札

伺之通地方取締向其外共、其府え関係之事件は、以後直達相成不苦候事

(朱印)

受付
布告掛

『四十四』

『己巳十一月十九日』

邸宅之儀都而引渡可申候条、日限之儀は土木司え打合可有之候也

十一月十九日

民部省

東京府御中

『四十五』

市谷田町四町目

五人組持地借

政次郎

市谷田町四町目立跡

一、八百四拾四坪式合八勺八才

右受負壹ヶ年金七拾兩上納之積ニ而、場所大切ニ相勤、往還持場之儀兼而町並之通取賄、地代之儀最寄町々え見合、不相当之儀無之様貸附、御法度筋堅相守、家作屋敷茅葺等ニ而は不相成、何れも瓦葺ニいたし、火之元嚴重ニ申付厚取締致し相勤、全之更地ニ付、普請中当月々七月迄三ヶ月上納御宥免被成下候間、八月より十二月迄五ヶ月分上納金は、月割を以、来ル十二月先納いたし、来午正月々六月迄半年分ハ、当十二月十日相納、残り半年分ハ、来午七月十日相納、右順ヲ以兩度ニ先納可致旨被仰渡奉畏候、仍如件

市谷田町四町目立跡尾州邸前火除地明地之儀、今般如旧町屋ニいたし、地稅受負上納之儀申渡候間、為心得同藩え御達有之度候也

己五月

東京府判事

弁事御中

市谷田町四丁目尾州邸火除之儀二付、去ル十四日御掛合相成候由二而、写被御差越承知致候、右は矢張本書とも落手相成候得共、未尾州えは相達不申候、然ル処、先般^{(一)字アキ}、^{(二)字アキ}尾州え被相渡候末二付而は、無余儀事情無之而は輕易二取計も難致候間、何卒外二何れ^{(三)字アキ}場所歟町人えは被相渡、打追^{(四)字アキ}之通尾州えは被^{(五)字アキ}下置候様有之度候、此旨及御談候也

五月廿二日

行 政 官

東京府御中

市谷田町四丁目尾州邸火除地之儀二付被仰越候趣、委曲承知致し、同所町屋二致候儀は見合、受負人えは外場所見立相渡候様可致候間、其段同藩え御達有之度、此段及御挨拶候也

五月廿三日

東 京 府

行政官御中

市谷田町四丁目

五人組持地借

政 次 郎

其方儀、先達而新規町屋受負申付置候処、同所は模様替二付、為代地、牛込船河原橋際久世平九郎上地千貳百坪余并同所神楽坂上岡野房太郎外屯人上地千坪余、新規町屋取建受負致度段申立ル二付、相糾候処、不相当之儀も不相聞間、願金高ヲ以五ヶ年受負申付ル、就而は地代納方其外都而先達而申渡候通可相心得

右之通申渡候間、其旨可存

巳六月四日

『四十六』

『巳巳六月十四日小印』

武右衛門義、町内境七拾四坪式合、外二河岸地九坪潰道、代金三拾兩二而買下ケ之儀願出候ニ付、下掛リ見ニ差遣取調候処、最寄見競沽券不相当之義も相聞不申候間、右金高二而願之通り買下ケ可被仰付哉、依之被仰渡案其外書類相添、此段相伺申候

申渡

深川西平野町

家持

武右衛門

其方儀、町内境潰道買下ケ願出ルニ付、相糾候処、不相当之儀も不相聞間、願之通申付ル

但、町役其外並之通可相勤

右申渡ス趣、証文申付ル

右

町役人

右之通申渡ス間、其旨可存

巳六月十八日

深川西平野町同所東平野町兩町境潰道

表田舎間

三間

一、裏幅

同断

裏行

式拾四間四尺

此坪 七拾四坪式合

右両町境河岸地

表田舎間

三間

一、裏幅

同断

一、裏行

同断

此坪九坪

右式ヶ所 八拾三坪式合

此代金三拾両

右地所、今般御払下之儀奉願候処、願之通被仰付、書面之代金今日上納仕候得は、右地所御渡被下奉受取候、然ル上は、町役其外並之通可相勤旨被仰渡奉畏候、為後証御裏書奉願候、仍如件

深川西平野町

家持

願人

武右衛門印

五人組

印

添年寄

々

中年寄

々

東京御府

『右は裏書致し、割判之上、下ヶ遣ス』

『四十七』

永代橋・新大橋・大川橋東西助成地葭蕀張之儀、去辰九月中定住家作相建可申旨、出商人共え被仰付候二付、追々出来仕候処、右場所之義は未夕町銘も無御座候、然ル処、今般区内人別取調可申旨被仰渡、現在之人別御調二付、元町々人别有之候而も、其所二不罷在者共相除候間、助成地之もの人別之儀自然相洩可申と奉存候、差向候人別調は、永代橋・大川橋助成^(地脱之)は双方区別二而引受取調、新大橋は西方壱円武家二而、四番組町方遠不弁利二付、東方四拾七番組区外二は候得共、同組二而引受取調候積、一体三橋之儀は是迄仕来有之、永代橋・新大橋二橋は東方、大川橋は西方二而諸用取扱来候間、御橋付助成地東西二引分レ候而は不都合二も有之候間、是迄之通一方二而取扱候而苦カル間敷候哉、心得方奉伺候、以上

明治二巳年三月

中年寄

村松為 谿

佐藤忠右衛門

今井二郎

上

三橋東西助成地定住家作被仰付候二付、左之廉々奉伺候

三橋東西年寄共

一、永代橋東方は四拾八番組区内佐賀町続、西方は七番組区内北新堀町続、大川橋西方は四拾三番組区内花川戸町、東方は四拾四番組区内中之郷竹町続、新大橋東方は四拾七番組区内元町続、西方は四番組区内浜町武家方続相成候

右區別ニ而年寄支配可仕心得之処、新大橋西方は四番組区内相成候得共、町方は難波町ニ而、凡三四町相隔、殊
ニ助成地家数少ク一町立兼、其上隣町合併之便り無之、四拾七番組元町よりは橋相隔候迄ニ而、通達方弁利ニ候
得共、區別有之、元町え合併も難申上迷惑仕候

一、助成地出商人共、是迄は聊之地代ニ而拜借罷在候ニ付、出水出火之節は防方御用相勤候処、向後地代町並之通
差出候上は、非常之砌相当之御手当被下置候歟、又は人足御雇上ケ可相成哉

一、橋上夜番人・定抱人足等は、非常之御手当ニ付、是迄之通可被差置哉

一、地代上納之儀、是迄は橋付入用分差引勘定致シ上納可仕哉

但御橋付諸入用御下ケ渡相成候上は、助成地之唱相改、追而町銘可相伺、助成地上納受負地又は御買下ケ可被
仰付哉

一、三橋共東西往還意^(マ)麥取計方之儀、武家方屋敷前往還は、中央ヲ境ニ相心得候間、其御筋え兼而御達被下候様仕
度

右廉々御下知奉願候、以上

巳六月

今井二郎

佐藤忠右衛門

村松為谿

『巳巳七月三日小印』

初ヶ条、四番組区内と心得、難波町と掛隔候間、家数少ニは候得共、新規町名相伺可申候

式ヶ条、非常之節は相当之御手当被下候間、水火之防方従前之通相心得可申事

三ヶ条、書面之通は非常手当之儀ニ付、先従前之通相心得可申事

四ヶ条、地代は不残上納可致候、入用筋は、取調之上、下ヶ渡可申、且地所之儀願候上は、受負又は買下ヶ二も可被仰付候事

五ヶ条、書面之通相心得可申事

六月晦日

『四十八』

近来町々河岸地を火焚所ニ相用、又は御堀端其外道式等え建物致し候も有之哉ニ相聞、取調方手廻兼候間、捕亡方巡邏之節、心付場所書留申上候様仕度、左候ハ、直ニ呼出シ取計方申渡、差支無之場所は請負入札其払等ニ取調可申哉奉存候、此段相伺申候

巳六月晦日

『巳巳十二月二日申渡』

世話掛 中年 寄

河岸地代之儀、以来受領地拜借地等之差別なく、沽券地先同様処置、地代上納可致事
右之趣、町中不洩様可触知もの也

十二月

『四十九』

本石町三町目家持長崎屋源右衛門儀、今般長崎県用達申付、御用向為取扱候ニ付而は、別紙之通願立候ニ付、当春上地被仰付候地所、従前之通宜被仰付被下候様仕度奉存候、以上

巳七月

長崎 県

東京府御中

御書面之趣承知いたし取調候処、諸向用達共え従前之通受領地被下候儀難相成筋ニ而、本文源右衛門儀も同様之もの二付、何分難差許候、依之別紙返却、此段御挨拶および候也

東京府

乍恐以書付奉願上候

本石町三町目家持源右衛門奉申上候、今般私儀長崎県御用達被仰付、御扶持方三人扶持被下置、誠以冥加至極難有仕合奉存候、依之私儀数年來受領仕候本石町三町目北側二軒目、京間五間、此坪百坪地所、当春より上地被仰出、当時地代上納之上住居仕候得共、此度御用向も被仰付被下置候二付、何卒是迄之通、右地所受領被仰付被成下度奉願上候、此段御許容偏ニ奉願上候、以上

明治二巳年六月廿四日

本石町三町目

家持 長崎屋 源右衛門

月行事 久右衛門

東京御府

『五十』

『己巳七月廿日申渡』

浅草新旅籠町

家主惣代

新 八

其方儀、町内統元書替所上ケ地受負いたし度段願出ルニ付、相糾ス処、不相当之儀も不相聞間、願之金高を以五ヶ
年季受負申付ル間、不取締之義等無之様可致、尤上納其外之儀、常務方差図可請

右 町年寄

右之通申渡間、其旨可存

巳七月

『五十一』

『巳巳七月廿日申渡』

市谷片町

家持 京四郎

其方儀、地面町内除地表田舎間四間半、裏幅同断、裏行二間、此坪九坪、代金拾壹兩壹分二而買下ケ之儀願出ルニ
付、相糾ス処、不相当之儀も不相聞間、願之通申付ル

但、町役其外並之通可相勤

右 町年寄

右之通申渡間、其旨可存

巳七月

『五十二』

『巳巳七月九日』

橘町志町目

平兵衛地借喜三郎方同居

又 四 郎

難波町裏河岸

与兵衛地借政次郎方同居

弥 太 郎

其方共之内、又四郎儀病氣ニ付、願之通弥太郎後見差免ス、元受領地之儀は、更ニ弥太郎え拝借申付ル間、地稅納方等之儀は、最前申渡ス通可相心得

右 町 年 寄

右之通申渡間、其旨可存

巳七月

『五十三』

『巳巳七月廿日申渡』

神田鍋町北横町

磯吉地借

文 藏

其方儀、神田佐柄木町統金田貞之助上ケ地買下ケ、新開町屋取建度段願出ルニ付、相糾ス処、不相当之儀も不問間、相願ふ金高二而家作共買下ケ申付ル

但、町役其外並之通可相勤

右 町 年 寄

右之通申渡間、其旨可存

巳七月

神田鍋町北横町

磯吉地借

文 藏

此者儀、同所佐柄木町統徳川新三位中将家米金田貞之助上地、表田舎間式拾四間三尺、裏幅同断、裏行裏四十四間三尺、西四十四間三尺、此坪千四拾壹坪式合建家共、代金千八百七拾五兩二而、此度買下ケ之儀願出ルニ付、相糾ス処、不相当之儀も不相聞間、願之通買下ケ申付之

但、町役其外並之通可相勤

右之通被仰渡奉畏候、仍如件

年号月日

右 文 藏
町年寄

(『五十四』脱)

深川佐賀町

家持藤吉阿州住宅ニ付店支配人

円 助

同町

五郎兵衛地借

松 五 郎

其方共儀、円助は、同町統小栗啓之助土地金百拾兩、松五郎は、同鈴木吉五郎土地金百兩二買下願出ル二付、相糾
ス処、不相当之儀も不相聞間、願之通買下ケ申付之
但、町役其外並之通可相勤

右之通申渡間、其旨可存

巳八月五日

右 町年寄

『五十五』

覚

靈岸島南新堀二町目

一、町屋鋪 式百九拾式坪七合五勺余

右は家来差置申候

同

一、同 百四拾五坪式合五勺

右は家来額田卯左衛門所持、町人共二貸置申候

前書之通古券代届済之上、兼而由緒有之候間、野村銀蔵と申もの為取締差置、并額田卯右衛門(マモ)、奈良賀屋新兵衛
と申ものえ貸置申候、右地所は国許米穀并諸産物船廻等之都合も有之儀二付、先前之通相心得候而可然哉、此段奉
伺候、以上

七月廿二日

上杉從四位内

小川源太郎

東京府御役所

附札

書面之出候地所之儀、元來沽券地之儀ニ而都而町並之取計ニ有之間、沽券代町人相付可申事

『五十六』

『己巳七月九日』

尾張町二丁目

利兵衛地借

次郎吉

其方儀、今般英國文学有志之者え教授いたし度、右ニ付稽古場地所拜借致し度段願出ニ付、露月町統遠山三之助上地之内、四百三拾七坪五合余之場所、願之通拜借申付ル、尤地稅之儀は追而可及沙汰

右 町年寄

右之通申渡旨、其旨可存

己七月

『五十七』

『己巳八月九日』

四ッ谷永住町ノ内

太宗寺門前

右門前地之儀、品川縣支配所内藤新宿ニ朶居、同県ニ而支配いたし候方弁利宜候間、今九日品川縣え引渡申候郡政方

『五十八』

神田元柳原町

町年寄 嘉兵衛

其方儀、同町自身番屋商ひ番屋跡之三拾坪式合五勺有之地所、金五拾兩二而買下ケ願出ルニ付、相糾ス処、不相當之儀も不相聞、願之通買下申付ル

但、町役其外並之通可相勤

巳八月十四日

『五十九』

『巳巳八月十三日廻シ濟』

書面高輪南町同所北町海岸地葭簀張掛茶屋之儀、是迄年々三月々十月迄差免相成居候処、可取払時節ニ至候而も其儘差置、却而不取締ニ付、外町々河岸地之振合ヲ以、願之通年中御差免相成候方可然哉ニ奉存候、尤地代上納高之儀は、最寄河岸地代上納高二見合取調候処、一ヶ年金式拾五兩二而相当可仕候、依之別紙被仰渡案相添、此段相伺申候

巳八月

高輪南町

地主惣代兼

町年寄

久兵衛

外五人

同所北町

同断

同

善右衛門

外四人

其方共、町内地先河岸地之内、武家・寺院地先相除、長四百五拾壹間半、幅三間之場所、(町地)内持受負地ニ致し、是迄之姿ヲ以葭簀張掛茶屋并納屋物置等補理、年中差置度段願出ルニ付、相糾ス処、差障之筋も不相聞問、願之通差許ス、然ル上は、外河岸附町並之通相心得、定住火焚所ハ決而不相成間、不取締之義無之様いたし、地代之儀は一ヶ年金式拾五兩ツ、可相納

八月十四日

『六十』

麻布六本町(本町)

家主

与市

同所市兵衛町

町年寄

市十郎

其方共之内、与市儀町内統岡本玄治上ヶ地、市十郎は川村権七上ヶ地新規町家取建受負いたし度段願出ルニ付、相

糺ス処、不相当之儀も不相聞問、相願ふ金高ヲ以、五ヶ年季受負申付ル、不取締之儀等無之様可致

但上納其外之儀は、常務方差図可請

右 町年寄

右之通申渡問、其旨可存

巳八月十三日

(六十一) 脱

『巳』八月十三日廻済』

書面河岸地ニ付、火焚所ニは難相成場所ニ候得共、在来之自身番屋を町用扱所ニ致シ候義ニて、後弊も有之間敷候間、御聞届相成可然哉奉存候、此段相伺申候

八月十三日

拾壹番組之内

松村町

拾四番組之内

芝口壹町目

右は是迄町用扱所ニ而用弁致シ居候処、今般右町々地先河岸地之内、御願済有来候自身番屋を町用取扱所ニ相用申度、河岸地之儀ニ付、此段奉伺候、以上

八月九日

右 年寄 共

附札

聞届候事

『六十二』

兵部省御中

東京府

東京府中、武家屋敷并市中竈総員数御入用之儀有之二付、大凡取調之儀御申越之处、武家屋敷之儀ハ取調中ニ而相
分り兼申候、弁官え御問合之方早速相分り可申哉ニ存候、町方之儀ハ、大凡当四月取調高を以申進候、依之別紙相
添、此段及御答候也

九月廿日

一、凡六百拾軒

藩知事邸

一、大凡貳千軒

諸官員邸

一、凡八百五拾軒

民部省
大藏省 勤之者邸
兵部省

一、凡三拾四軒

中大夫邸

一、凡二百三拾三軒

下大夫邸

一、凡六拾七軒

上士邸

一、凡千八百八拾四軒

弁官支配邸

一、凡三千四百拾三軒

同附邸

一、大凡千軒

諸藩え御貸渡相濟候事

一、大凡貳千軒

同願中其外邸

右之通有之候也

巳九月

『市中竈数元帳ニ無之』

『六十三』

別紙之通、申出有之ニ付、来月二日迄之内名称相改候様可然存候也

七月廿五日

弁官

東京府

昌平橋

向後旧名之通相生橋と改候様仕度事

昌平坂

向後旧名之通本郷坂と改候様仕度事

右は、昌平学校今般当分大学校と被仰出候上は、前ニヶ所共、但書之通御評議被仰付度候也

七月廿五日

大学校

挨拶

御書面之趣承知いたし、昌平橋外ヶ所名称改之義、其筋え布告いたし候、此段及御答候也

七月廿七日

東京府

一、昌平橋改

相生橋

一、昌平坂改

本郷坂

右旧名之通、来月朔日より名称相改候事
右之趣町中不洩様可触知もの也

七月廿七日

『六十四』

『己巳八月廿五日小印濟』

書面惣録願之趣、難被及御沙汰筋二付、其段申達、願書差戻候様可仕哉、相伺申候

己八月

以書付奉願上候

一、支配盲人、檢校・勾当・在苗・一名之者共、是迄武家地借地罷在候処、夫々上地等二相成候間、今般改而右上地之内拝借奉願候二付、其最寄年寄之添書を以可奉願旨、当六月八日被仰渡奉畏候、其段支配之ものえ相達候処、右様最寄年寄之支配受候様相成候而は、素より盲人之儀難洪仕候趣を以、夫々歎願致し呉候様申出、就而は奉願候も恐入候得共、支配之もの共拝借地願二不拘、以来之儀も御手数奉掛候而は、对上え惣録二おるて奉恐入候儀二御座候間、向後武家上地之内拝借地罷在候支配盲人共人別、并地受人ハ不申及、御地代上納之儀、惣録え取立無遅滯上納仕、可成丈御手数不奉掛様仕度奉存候間、何卒以御憐愍願之通被仰付被下置度、就而は上地之内拝借願書之儀も、惣録奥印而已二て御採用被成下置候様、当七月廿二日、以書面奉願、猶又当月八日、以書面右願之趣奉伺候通被仰付被成下置候様、偏二奉願候、以上

己八月

惣録 山村 檢 校印

『己巳九月』

以書付奉願候

一、支配盲人、檢校・勾当・在名・一名之者共、是迄武家地借地罷在候処、夫々土地等二相成候間、今般改而右上地之内拝借奉願候二付而は、惣録奥印は勿論、其最寄年寄之添書を以可奉願旨、当六月八日屋敷御改御役所より被仰渡奉畏、其段支配之者共え相達候処、右最寄年寄ニ於ハ、添書等は不仕奥書加印仕候由、就而は惣録奥印ニは及不申旨、右最寄年寄申聞候趣を以、夫々盲人共惣録え申出候、右は、是迄支配盲人共願之儀は、何事ニ不寄惣録奥印仕候儀ニ御座候間、前文被仰渡之通最寄年寄ニ添書いたし、惣録奥印仕候而御採用被成下候様奉願度、且又受領地・拝借地等二借地罷在候支配盲人共儀は、夫々地主も御座候儀ニ付、右方え地代上納并人別・地受人等差出候儀ニ付、別段最寄年寄方え人別・地受人等差出不申候儀に御座候ハ、右年寄之手数不相成様、是迄之通被成下置度、偏ニ奉願候、以上

明治二巳年九月

惣録 山村 檢 校印

東京御府

『己巳十月三日小印濟、即日附札相達』

附札

書面上地内拝借相願候節、惣録奥印、最寄年寄添書を以可申出、且屋敷主有之地借之分も、最寄町来住人別二入、町年寄進退受候儀と可心得事

『六十五』

廿三番組

麴町平河町四町目続

行政官附

三輪仁兵衛受領地

元用達

岩井源太拜領地上地

同

岩井与左衛門拜借地上地

同

春日播磨同断

同

蓮池佐一郎同断

右受領地上地五ヶ所共、地主抱人足等之名目ニ而、住居人共家作旧米町屋並ニ相成居、平河町四町目え入交り、見渡し候而ハ境界も無之、一面之町屋御座候間、今後同町え合併町屋敷ニ被仰付度奉存候、右ハ書上候沽券絵図地面ヶ所番附之内え差加え不申候而は、右町番附不順ニ相成候間、御下知濟之上、絵図面相仕立候様仕度、且右住居人共来住人別ニ差加候而は、先般御下知御座候看板等差出商売相成兼候ニ付、住居人共相歎罷在候趣も相聞申候、仍之別紙絵図面相添奉申上候、尤上地之分、隣町其外之者より御払下ヶ・受負地等ニ御願中ニ御座候得とも、此御願濟ニ不抱^(不)、書面之通被仰付度奉存候、已上

巳九月

二拾三番組

年寄 松村 福次郎

矢部 与兵衛

絵図面略ス

伺濟

書面申上候趣勘弁仕候処、先般町入用等御変更之砌、受領地・受負地等之無差別、公平之出銀方申渡候儀ニ而、尤右地所ハ屋敷地ニ而有之候へとも、已来沽券町地ニ引直シ候方可然と存候間、伺之通申付候様可仕哉、此段奉窺候、以上

十月

麴町平河町四町目続

弁官附三輪治兵衛土地

一、三十坪

此地代、壹ヶ月銀四拾貳匁

内銀二匁五分、井戸通路上り高無之

但不残表坪壹坪二付銀壹匁四分ツ、

元用達

岩井源兵衛土地

一、百九拾六坪三合

此地代、壹ヶ月銀貳百貳拾七匁八分貳厘五毛

内銀四拾貳匁貳厘五毛、井戸通路上り高無之

但表坪六拾五坪、壹坪二付銀壹匁七分

横町表坪五拾坪八合三勺、壹坪二付銀壹匁二分

裏坪八拾坪四合七勺、壹坪二付銀七分

元用達

岩井与左衛門土地

一、三百坪

此地代、壹ヶ月銀三百七拾匁

内銀百貳拾四匁一分九厘 通路并當時明キ地ニ付上リ高無之

但表坪百六拾坪 壹坪ニ付銀壹匁七分

裏坪百四拾坪 同 銀七分

元用達

春日播磨上地

一、百五拾坪

此地代、壹ヶ月銀貳百三拾壹匁七分五厘

但表坪七拾五坪 壹坪ニ付銀貳匁

裏坪七拾五坪 同 銀壹匁九リ

元用達

蓮池佐一郎上地

一、四百三拾壹坪七合三勺

此地代、壹ヶ月銀三百九拾壹匁八分壹厘壹毛

内銀貳百四拾匁九分六リ壹毛 井戸通路當時明キ地ニ付、上ケ高無之

但表坪百拾貳坪 壹坪ニ付銀壹匁五分

裏坪三百拾九坪七合三勺 同 銀七分

右五ヶ所共、旧米町屋並ニ相成居候ニ付、以後麴町平河町四町目え合併、町屋敷被仰付候間、是迄住居人共銘々拜借と相心得、町役其外町並之通相勤、書面之地代町年寄共取集、町入用支払、殘金七月十二月兩度ニ当御府出納方

へ上納可仕、且明キ地拜借相願之もの有之候ハ、兼而被仰渡候通心得可貸渡旨被仰渡奉畏候、為後日仍如件

明治二己年十一月

麴町平河町四丁目

町年寄 元次郎

式拾三番組

中年寄 松村 福次郎

『六十六』

御葉園地所并上地部分

大病院

小石川

一、御葉園

式ヶ所

右は旧政府之節、葉園奉行岡田源三郎、芥川・小野寺兩人壹ヶ所ツ、預り

九段坂上

一、御葉園

壹ヶ所

但、御役宅附

御堀端壹番町

一、御葉園

三ヶ所

右御葉園地所

駒場

一、御葉園

壹ヶ所

此分上納

市ヶ谷蓮池

一、御菜園附属地

同

四ッ谷津ノ守坂

一、右同断

同

深川入船町

一、右同断

同

本所入江町

一、右同断

同

赤坂氷川

一、右同断

同

麴町

一、右同断

同

二ヶ所

同

同

壹ヶ所

同

五ヶ所

牛込神楽坂

一、右同断

青山百人

一、御薬園

此分上地

大久保百人

一、同

同

根来

一、同

同

右之分上地

巳四月

御薬園上地取調帳

御居置場所

小石川

一、御薬園

式ヶ所

大病院

但、朱引之通切坪上地

九段坂上

一、同

但、朱引之通助成地上地

御堀端壹番町

一、同

但、朱引之通切坪上地

上地場所

駒場

一、同

壹番町

三番

一、同

市谷蓮池

一、御菜園地所

四谷撰津守坂

一、同断

深川入船町

壹ヶ所

貳ヶ所

壹ヶ所

同

貳ヶ所

同

一、同断

本所入江町

一、同断

『巳八月十五日、河岸並之冥加上納可致旨申渡』

赤坂氷川

一、同断

右は旧政府之節より御葉園地所

麴町

一、御葉園

牛込神楽坂

一、同断

青山元百人

一、同断

大久保元百人

一、同断

根来元百人

同

壹ヶ所

同

五ヶ所

壹ヶ所

元受領地

添地

元受領地

添地

元受領地

添地

根来元百人

是は、去辰九月中御葉園地相成候角筈村裏通調練場

新畑開発人穩田村清兵衛

一、御薬園

元受領地 貳ヶ所

添地 壹ヶ所

右は、御薬園御居置場所上地之分取調候処、書面之通御座候、依之絵図面相添、此段申上候事

巳四月

渡辺大輔
有村泰藏

『巳巳六月』

乍恐以書付奉申上候

一、本所入江町河岸御薬園附地所取調可申付旨被仰渡候二付、取調左ニ奉申上候

此段右御地所之儀は、入江町住居之者地先ニ付、御地所拝借致薪置場等ニ仕、銘々拝借間敷ニ応し収納取集、壹ヶ年御助成金三兩程相納候処、文化十四丑年十月中、御薬園附御地所ニ相成、文政七申年十月中、御助成金洪江長伯殿え相納来候処、嘉永四亥年中より右金高相納来候処、猶又文久二戌年中より、金八兩ツ、上納可致旨被申渡候二付、右金毎年七月十二月兩度ニ是迄相納、右御地所え納屋壹ヶ所相建、其外不残薪置場ニ致罷在候、依之別紙絵図面相添、此段奉申上候、以上

巳六月

中年寄 高麗佐平太

東京御府

『六十六』

『巳巳八月十四日』

大病院より引渡相成候元御薬園助成地之内、書面之場所は全河岸地ニ付、助成地之名義相止、河岸地並同様之冥加上納可致旨可申渡哉、此段相伺申候

巳八月十四日

一、本所入江町々年寄平三郎・文六・藤松、右三人之者奉申上候、当町河岸地元御薬園付御助成地、表間田舎間七拾七間壹尺式寸五分、裏幅同断、河岸行同七間三尺五寸、此坪数五百八拾五間四合九勺七才、御冥加金壹ヶ年金八兩ツ、上納仕来候処、今般東京御府え私共被召出、右御薬園附地所之儀は、当御府附と可相心得旨被仰聞奉承伏候、就而は、従来町内二有之候右御地所之儀は、私共え代金百兩二買下ケ被仰付被下置候様奉願上候、尤右御地所願之通り被仰付候得は、関板・しからみ・地形等其外共、余程入用等も可相掛と乍恐奉存候、則絵図面相添奉願上候間、御見分之上、何卒出格之以御仁恵此段御聞濟被成下置候様、偏奉願上候、以上

明治二巳年七月十八日

本所入江町

町年寄 平三郎

文 六

藤 松

東京御府

本所入江町河岸元御薬園御助成地、間口・坪数・地位等取調可申上旨被仰渡候二付、取調左ニ申上候

一、表間口 七拾七間壹尺式寸五分
河岸行 七間

此坪数五百四拾坪四合五勺七才

右は、壹ヶ月壹坪ニ付銀四厘六毛ツ、上納仕来候処、其後追々冥加上納増被仰付難洪罷在、当時最寄河岸地冥加上納見競、別紙絵図面相添、此段奉申上候、以上

巳八月

三葉	
本所 入江町河岸地 冥加壹坪二付 壹ヶ月 銀四厘六毛	七間 七拾四間壹尺貳寸五分 元御樂園御助成地
本所長崎町 河岸地 冥加壹坪二付 壹ヶ月 銀四厘	七間 花町河岸地 冥加壹坪二付 壹ヶ月 銀六厘貳毛四糸

本所 長崎町

本所 入江町

本所花町 元時鐘屋敷	入江町
---------------	-----

四拾五番組 年寄 共

差上申御受書之事

一、本所入江町々年寄平三郎、同藤松、同文六奉申上候、当町河岸地元御薬園御助成地、表間口七拾七間壹尺式寸五分、裏幅同断、河岸行七間三尺五寸、此坪五百八拾五坪四合九勺七才、御冥加金壹ヶ年金八兩上納仕来候処、今般東京御府附と可相心得旨被仰渡、然ル処、右御地所私共方え買下ケ被仰付被成下置候様、当七月十八日奉願上候処、今日私共被召出、御地所之儀は買下ケ不相成候趣被仰渡奉畏候、然而は、向後河岸地並同様相心得、御冥加金之儀も、外河岸並同様上納可仕旨被仰渡、是又奉畏候、依之御請書差上申候処、仍如件

明治二巳年八月十五日

本所入江町

町年寄 平三郎

同 藤松煩二付

代兼 文 六

東京御府

『六十七』

享和元酉年四月樽与左衛門より養生所附町屋鋪ヶ所書

一、八町堀北紺屋町

式ヶ所

一、同所金六町立跡

三ヶ所

一、神田堅大工町

壹ヶ所

一、同所花房町

式ヶ所

一、金澤町

壹ヶ所

一、丸山新町

壹ヶ所

一、本郷御守殿門通	壹ヶ所
一、東湊町	壹ヶ所
一、源助町	壹ヶ所
一、飯倉町五丁目	壹ヶ所
一、芝浜松町三丁目	壹ヶ所
一、芝永井町	壹ヶ所
一、麴町七丁目	壹ヶ所
一、本所柳原四丁目	壹ヶ所
一、日本橋音羽町	壹ヶ所
一、鈴木町	壹ヶ所
一、水谷町櫓地面	壹ヶ所
一、本郷菊坂道造屋敷	壹ヶ所
一、深川築地書地面	壹ヶ所
合式拾四ヶ所	

本稿は、二〇二〇年度科学研究費補助金研究課題番号二〇五二〇五九一「近代移行期都市社会における社会的結合の変容」による成果の一部である。

(続く)

(よこやま ゆりこ 本学非常勤講師)